

コラム?

# 辞書の文字の話

## 英語辞書編集部

見出しは太くて目立つ書体。重要な訳語はゴシック。成句は太い斜体。……辞書にいろいろな種類の文字が使われていることは誰でも知っている。しかしいったい何種類の文字が使われているのか、などと考えてみる人はあまりいないだろう。辞書にはどんな種類の文字がどんなふうに使われているのかを『ジーニアス英和辞典 第3版』を材料に紹介してみよう。

まずは見出し。同じ書体を大きさ（級数<sup>※</sup>）を変えて使い分けている。A、Bランクは16級、C、Dランクは14級。分離複合語（2語以上からなる見出し）はこの辞書では1語目の下位項目という位置づけにしているので、やや小さく13級にしている。ほかに別綴り（11級）というのがあり、たとえばcolorの項で「color,」の後に「〔英〕-our」と小さい文字で出ているのがそれである。ちなみに「catalogue,（米ではしばしば）-log」では「-log」は小さくはない。両方で書き方が違うのはなぜか、理由を考えてみてほしい。

成句見出しは太い斜体。これも重要なもの（\*つき）は級数を上げているので2種類の大きさがある。

本文の和文は一般的な明朝体だが、よく見ると仮名の横幅が少し狭くなっているのに気づくだろう。多くの字数を収録するために、漢字の3/4の幅に設計された仮名を使っているのである。重要語義や語義の大区分（I、II、III...）のタイトルなどには太いゴシック体の文字を使っている。〔正式〕〔英〕〔叙述〕〔限定〕などの文字が左右に圧縮されているのがわかりだろうか。本文とは異質の「記号」として読んでもらうための工夫である。

見出し以外の欧文はどうか。用例などの本文書体には立体と斜体がある。用例の中で定型句を表すために太い斜体を使っているが、成句見出しほど強くない書

体を選んでいる。

参照先が成句の場合、その成句が扱われている見出しを示すのに「=change PLACES.」のようにスモールキャピタル（小さめの太文字）を使っている。

発音はIPAにもっともふつうに使われるセンチュリーールドという書体。本文の欧文とは別である。

語形変化は、見出しよりは細く小さいが本文よりはだいたい太い書体を使っている。これと文型の〔SV to O〕のtoは同じ書体だが、後者の方が1級大きい。

文型表示や成句中に出てくるS、V、Oなども、本文とは違う書体を使い、しかも左右を圧縮している。これも文字というより記号であるから、本文と視覚的に差がつくように工夫しているのである。

語義番号は見出し用の書体を大きさを調整したうえで使っている。ただし、これが「→4.」のように参照先になる場合は級数を下げている。語義番号の意味であることを無理なく伝えるために書体は同じものを使い、ただし当該の語の語義番号と紛らわしくないようにこちらは小さくしているわけである。

成句と分離複合語の語義番号は(1), (2), (3)...としている。これらは見出しの下位要素であるから、その語義番号も見出しの語義番号1, 2, 3...より弱い印象のものにしなければならない。しかしある程度目立つ必要もあるので、数字をゴシックにしている。

厳密にいうとまだ少しあるのだが、以上が『ジーニアス英和辞典』で使われている書体のほぼ全容である。数え方が難しいが、級数違いを含めて数えるとだいたい30種類くらいを使っていることになるだろう。

そして、普通の文字以外に様々な記号がある。 などの品詞記号、 などのロゴ、 の記号、品詞記号の前の——などである。カッコ類は（ ）〔 〕〈 〉〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕の8

